

1 学校教育目標	内 容	R6評価
	理論と実技を同時に学ぶ実践型の教育により農業技術の高度化、経営の専門化に対応する知識、技術を習得させるとともに、自ら目標やテーマを定めて行う模擬経営・プロジェクト学習並びに寮生活等により他者との協調、自己の確立等の社会性を涵養し、次代の農業・農村を担う優れた人材の養成を目指す。	B

2 重点目標	内 容	R6評価
	学生の学習意欲の向上に向けて授業内容の充実・改善及び職員の教育力の向上を図るとともに、関係機関等と連携して学生の希望に応じたきめ細かな進路指導により就農率向上に努める。	B

3 当該年度の評価項目等

(1) 共通項目（総合農学科、実科・研究科）

評価項目		評価の観点	成果(○)と課題(●)	達成状況	改善策(■)	R6評価
学習指導	授業実習内容の充実を図る	授業改善に向けた取り組み ○ 授業科目の見直しにより実習の時間を十分に確保できたか。 ○ 学生が興味や関心を持ちわかりやすい授業を行うための、職員の教育力向上研修を計画的に設けることができたか。 ○ 国、県が開催する研修会に参加することができたか。その研修内容を共有することができたか。 ○ わかりやすい授業を行うため、ねらい、展開、見とどけの観点で授業を行うとともに実物やパワーポイント等を用いたか。 ○ 中間テスト等による学生の理解度の把握や学生への授業アンケートの実施(2回)と、結果を踏まえた授業の改善ができたか。 ○ 実習について、開始時に作業の目的や内容を十分に説明し理解させたか。 ○ 学生の授業、進路、寮生活などに関する要望を面談などにより随時把握し、学習内容や進路指導の参考としたか。	○ 学科目変更で実習時間を確保できたが、一時的に行事が集中し過密になる時があった。 ○ 魅力的な授業づくり、バスマント等職員研修を4回実施、国研修に3名派遣し内容は共有を図るなど教員の資質向上を図った。引き続き資質向上に対する取り組みが必要である。 ○ 3観点で授業を行うとともに、ほ場や実物、パワーポイント等を用いわかりやすい授業に努めた。引き続き魅力ある授業とするため学科目の見直しを行っていく。 ○ アンケート結果を授業に反映しやすいよう内容を見直し、前・後期末の2回実施し、結果を職員にフィードバックした。 ○ 実習について、目的や内容を理解させるよう説明を行った。 ○ 年間2回全員と個別に進路相談を実施、また個別の相談や模擬面接を実施した。 ● 進路相談について一部であるが、声掛けが足りなかった。		■ 冬期に集中していた資格取得等は可能な限り分散化を図る。 ■ 魅力ある授業づくりのため専門家による研修会を3回予定。職員の目標、中間評価、最終・評価・結果を体系的に実施することで共有を計画。 ■ 現在の学科目について検証を行い、見直しをかけるとともに、新たな学科目(地域づくり等)の導入を検討する。 ■ コミュニケーションを密にとり学生の資質も尊重した支援を心掛ける。	B
		新しい知識・技術への対応 ○ スマート農業に関する講義の充実と関連企業との連携強化及び新たな企業との連携ができたか。 ○ 「施設園芸ほ場モニタリングシステム」やタブレット端末等を活用した実践的なプロジェクト研究の支援ができたか。 ○ みどりの食料戦略に関する講義、学生チャレンジへの参加が実施できたか。 ○ 青年農業者、先進的農業経営体への視察研修や講義の拡充が図れたか。 ○ GAPや農場HACCPなど新しい国際規格の知識習得や、SDGsやエコマネジメントなどの農場経営における実践について講義、演習を実施したか。 ○ 関係試験場が開発した新技術や新品種について、現物を踏まえた適期での講義・実習が実施できたか。 ○ 農業機械の整備に関する授業が実施できたか。	○ スマート農業について講義の充実のため関連企業(4社)の協力を得て、現地での講義を開催した。 ○ 実践、農業経営コースのハウスへ「みどりクラウドシステム」を設置しハウス内環境のモニタリングを参考に環境管理ができた。 ○ みどりの食料戦略講義実施や学生チャレンジへの参加ができたが、学生の理解度については課題があると感じた。 ○ 県内外の先進的農業経営体への先進視察や座学の実施により講義の拡充を図った。 ○ GAPは、1学年を対象に農業生産工程管理学の講義を行うとともに、2学年は演習の一環で大豆でGGAP認証を取得するための演習を実施し、GGAP審査では、審査に学生も参加し、学生自ら説明を行い取得できた。実科研究科でも特別講義を実施した。 ○ 関係試験場が開発した新技術や新品種を用いた講義・実習ができた。また、生産振興研修会で栽培技術や販売等の情報を収集した。 ○ 農業機械Ⅱでの機械の整備を行ったまた、実践経営者コースではSSの冬季間管理や乗用モアの基本整備の授業を実施した。		■ 実習に活用できるよう新技術機種の情報収集を図り授業で活用。 ■ スマート農業に対応したコンバインや自動環境制御施設を装備する。 ■ 1年生農場実習を畜産から有機農業に変更実施する。 ■ 来年度は野菜でのGGAPの取得を目指し、引き続き専攻学生の参加により実施する。	B
		資格試験の受験者数と合格率の向上に向けた取り組み ○ 資格・検定試験の必要性を理解させ、受験者数のアップと取得意欲の向上を図れたか。 ○ 合格率向上に向け、学生のレベルに応じた個別指導や繰り返しの事前学習、小テストを実施できたか。	● 農業簿記検定(2回)は延べ46名と若干増えたものの合格率は、44%と昨年を下回った。 ○ 農業技術検定(2回)昨年と同じ延べ13名受験し2級2名、3級5名合格した。合格率は54%で昨年を上回った。 ● 毒物劇物取扱者試験について、昨年よりも多い34名が受験し、5名合格した。合格率15%で昨年を下回った。 ○ 大型特殊(農耕車)、フォークリフト、車両系建設機械、けん引(農耕車限定)免許等受講者全員が合格となった。 ○ けん引(農耕車限定)については校内で事前指導を行った。 ○ 過去問題の配布や教科書・問題集を利用した勉強時間を時間外も設け、合格率向上を図った。 ○ 資格取得の支援については積極的に取り組み、事前講習を行った。 ○ 農業簿記について講師以外の職員も個別にスキルアップを図り、学生のレベル応じて個別指導を行った。”		■ 農業簿記及び毒劇物合格率向上のため、受験対策だけでなく理屈、仕組み等分かる講義指導を行う。	B

	評価項目	評価の観点	達成状況	R6評価	
学習指導	効率的・計画的な農場利用で学習効果を高める	○ 実践経営者コース2年生の模擬経営実施のための農場や施設等の確保・調整ができたか。 ○ 計画的な作付により、年間を通したほ場の有効活用が図られたか。 ○ 1年生は、必要な実習ができたか。また、現地体験実習に必要な基礎的知識、技術を習得させたか。 ○ 定期的な農場運営会議の打ち合わせに基づいて各専攻とも計画的なほ場整備と適期にほ場管理ができたか。	成果(○)と課題(●) ○実践経営者コース2年生3名が模擬経営を実施するため、ハウス・果樹棚(ぶどう・りんごトレリス)を確保、1名がぶどう農家で長期先進農家実習を実施した。 ●アスパラガスが定植後年数が経過し欠株等が発生しており、計画通りの収量が上がらなかった。また、ハウスについても一部修繕が必要であった。 ○年間計画及び各専攻の計画に基づいて、ほ場を有効活用した。 ○1年生については、各専攻ごとに計画的な授業運営により、必要な実習を行うとともに、現地体験実習開始までに、ロープの結び方や刈払い機の操作法など必要な基礎知識・技術の習得を行った。 ○実科生については、小農具、農業機械を使った実習を通じ技能習得と安全操作の確認を行った。 ○ほ場利用計画や各部会での検討に基づき、適期管理を行うとともに、施設・機械については更新計画の作成を行った。	改善策(■) ■アスパラガスについて新植して整備を図る。	B
		○ 学生の進路の意向を聞き取り、その情報を職員間で共有できたか。 ○ 1年生は11月末を目途に将来の進路を決定し、年度末から活動するよう個別指導できたか。 ○ 2年生は12月末を目途に全員の就農及び就職先等が決定するよう指導できたか。 ○ 雇用就農に向け法人説明会の開催方法の見直しと授業との連携を強化するとともに、効果的な説明会の実施により、さらなる学生の就農意欲の向上を図る指導ができたか。 ○ 進路・就農指導等に関し、早い時期から農業農村支援センターや市町村等の関係機関とも情報を共有し連携して対応できたか。 ○ 関係機関と連携し、学生の円滑な就農支援や卒業後のフォローアップに取り組めたか。	○学生の意向について、個別面談や随時の聞き取りにより把握し、職員会議等で情報共有を図った。 ○1年生は入学直後に個別面談、11月に保護者を交えた三者面談を行い、個々学生に進路指導を行うとともに、その情報を職員会議等で共有し、適期指導を行ってきた。 ○2年生は、4月に本人と専攻担任、就農担当とともに面談を実施。随時の状況把握とともに毎月の教務会議で共有。本人の資質状況に応じた進路を助言。1年生は11月に三者面談を実施し意向把握と職員会議等で共有。 ○農業法人等合同説明会や授業・実習を通じ、就農への意識付けを行った。 ○就農を希望する学生には、地域の農業農村支援センター、市町村、JA担当者と情報を共有するとともに、就農計画認定の支援を行った。 ●卒業生の就農先(農業法人)への訪問等により卒業後のフォローアップを実施したが、一部離職者が出てしまった。また、一部就農希望の学生への就農支援において、現地機関との連携で問題があった。 ●本人希望が月日ともに変化したため、適時の徹底した助言ができなかった。	■専攻担任などと連携して、随時学生一人一人との接点を増やして適時の指導助言ができるよう配慮する。 ■総合農学科以外でも就農支援プログラムについて整備する。 ■早めに卒業後就農先の農業法人等からの情報収集を行う。	B
生活指導	社会的規範意識を高め、基本的生活習慣の育成に努める	○ 学年担当者会議を定期的に行って教授間の情報共有を行い、個別の状況に応じた支援ができたか。 ○ ホームルーム、交通安全・防犯・健康講座などを通じて、生命尊重や社会的ルールを守る意識を高めることができたか。 ○ 寮生活や自治会活動を通じて社会人としての意識を醸成する指導ができたか。 ○ 各学科ごとの状況に対応した指導ができたか。	○教務会議、学年担当者会議(学生係会等含む)で教授間で情報共有を行い、個別の状況に応じ複数の教授で支援にあたった。 ○2週間に1回程度の間隔でホームルームを開催し、社会規範の徹底、交通安全等の講座を計画どおり実施した結果、学生処分事案は発生しなかった。 ○毎月役員会を開催し、自治会主催の催しや寮内での問題について情報を共有するとともに適正な推進について支援した。また、自治会の活動費の範囲内で寮内の物品購入等を促し、予算の執行方法について助言した。 ●点呼が形骸化しており、実施している意義が低下している。	■在不在ボードの拡充等での点呼手法の改善について検討する。 ■規律ある学生生活を送り責任ある社会人となるために機会を捉えて指導を行う。	B
	自他の生命・人権を尊重する精神を養い、男女が共に支えあう豊かな心を育成する	○ 寮生活での活動を通じ、先輩と後輩の関係を学び、他人を尊敬し思いやる心を育てることができたか。 ○ 1・2年生共通の実習や寮自治会活動での交流事業等により、各コース間および学年間の交流が図られたか。	○寮生活における生活指導の他、社会組織活動としての自治会活動に必要な報告、検討などを指導するとともに、現地体験実習前の社会常識の指導等を行い、社会人として備えるべきことを指導を行ってきた。 ○新入生歓迎会等を役員を中心に開催し、交流を図った。また、全学体育大会、4県体育大会等体育授業や農大祭等の行事を通じ交流を深めた。 ○清掃の参加率向上を図るため、週2回、時間を授業終了後すぐに行うよう学生の発案で改善した。 ●清掃をやる人が固定化	■新年度の自治会役員で清掃方法について協議する。	B

学校運営	農業機械や施設機器の充実と適正な管理	農業機械・施設の充実 ○ 農場実習等の農作業に必要な機械と施設の修繕や更新計画表が作成できたか。 ○ 圃場管理に支障が出ないよう、十分な準備とメンテナンス、マニュアルや画像による技能の伝承を進められたか。 ○ 導入したスマート農業機器と設備の効率的利用ができたか。 機械の適正な管理 ○ 農業機械、施設及び機器の故障や修理情報が職員間で共有されとともに、使用後の保守点検のルール化或使用簿への記入徹底などにより、適切な管理運営が行われているか。 ○ 農業機械の適切な使用等について職員研修会が実施できたか。 ○ 適切な操作方法を習得させたくうえで学生に機械を利用させたか。また、複数指導体制を検討できたか。 ○ 修繕可能な機械類を見極め備品の有効活用がされたか。 ○ 使用できない機械の廃棄が行われたか。	○ 必要な農業機械と施設の修繕を実施するとともに、現状把握を実施し、主管課とも情報共有を図った。 ○ 使用年数が大きく経過している施設、農業機械が多い中で、予算の制約もあり、優先順位を付けて計画的に修繕・更新を行った。 ○ 機械の操作方法を、必要に応じて機械担当者から特別教授等に指導を行った。 ○ 実践、農業経営コースのハウスへ「みどりクラウドシステム」を設置しハウス内環境のモニタリングを参考に環境管理ができた。(再掲)	■ 更新計画を整備し、計画的な更新に努める。 ■ スマート農業に対応したコンバインや自動環境制御施設を装備する。(再掲)	B
	学校用地や施設の適切な維持管理	○ 実習棟、機械庫等は、定期整頓日の設定などにより整理整頓がなされているか。 ○ 定期清掃日の設定などにより、農場以外の学校用地や校舎等施設の維持管理が適切に行われたか。	○ G GAPを大豆で認証取得したこともあり、大豆調整室、機械格納庫、資材保管施設等の清掃・洗浄や各種マニュアルを掲示するなど行うことができた。 ○ 農場内を定期的に草刈りや清掃、施設の自主点検を行い維持管理を随時行うことができた。		B
	学生募集のPRを更に充実する	○ 学校案内、募集チラシを作成して配布し、県内外で農業大学校への関心を高めることができたか。 ○ サンデーオープンキャンパス、オープンキャンパスの充実と体験学習の見直しにより、農業大学校への関心を高めることができたか。 ○ 高校訪問や進路指導担当教諭会議等を通じて農大のPRや情報収集ができたか。また農業高校以外の進路担当教諭にも十分周知できたか。 ○ 農業高校との一層の連携を推進するために、「農大・農高の連携会議」を開催し、農高生の体験入学等を実施できたか。 ○ 改革を進めている農大の教育内容や就農支援の様子を農大ホームページのブログ等で頻繁に発信できたか。 ○ 農大ホームページ等で入試案内、行事等を計画的に紹介するとともに、授業や実習等の動画を載せるなど、積極的に大学校のPRを行うことができたか。 ○ 県外での学校PRを積極的に行えたか。	○ 高校の進路相談会やキャリアイベント等へ出席し個別の進路相談に対応(11校) ○ 学生募集の新聞広告(7回)、Web広告により県内高校(82校)、県外農業高校(55校)、県外アンテナショップ等への発信活動を実施(表示:45万回、クリック数:2,250回)、農業関係機関が発刊する情報誌への掲載 ○ 学校案内及びチラシを県内全高校、県外実績高校、JA広報誌へのとじ込み、関係機関へ配布・周知した。また、各実科研究科ではそれぞれ独自のパンフレットを作成し配布した。 ○ オープンキャンパス(以下OC)と体験学習を同日開催することで参加しやすい工夫を行い、本校の概要説明、校内見学、個別相談により高校生等にPR、実科研究科では場公開に併せてのPRを行った。また、総合農学科では新たに3月も実施予定[参加者数]夏OC(2日)120名、果樹実科研究科(1日)3名、体験学習(1日)8名、サンデーOC(18回)36名、銀座NAGANO説明会10名(3世帯)、高校進路ガイダンス・学校見学受入れ 2月末現在(のべ19校)201名 ○ 高校訪問では実科研究科と連携し、県内の農業高校及び入学実績高校(58校)へ学校説明・情報収集を実施。また、今年度新たに、北陸3県の農業高校(6校)へも訪問した。 ○ 農業高校との連携では、5月に農業高校進路担当教諭会議を、6月9月2月に農業大学校と農業高校の連携会議を開催し、校長及び進路担当教諭との意見交換・情報共有した。 ○ 授業の様子や学校行事等を農大専用ホームページに随時アップロードするとともに、学生自らがInstagramで情報発信した。また、県庁部局会見において、在校生による学生募集等のPRを実施した。 ○ 学校案内等は、県ホームページ(以下HP)でプレスリリースしたほか、農大専用HP・試験場HP・Instagramへの掲載、農業関係団体の専門誌やHPにも掲載し、積極的にSNSを活用した。	■ 高校生以外へのPR方法について検討をする。 ■ 引き続きタイムリーなホームページへの掲載に努める。	A
	ホームページの充実を図る	○ 広報委員会を定期的に開催するとともに、HPのあり方や新たな広報手段等が検討されたか。 ○ 学生の自治会活動や実科・研究科の情報のHPへの掲載を支援できたか。 ○ 改革を進めている農大の教育内容や就農支援の様子を農大ホームページのブログ等で頻繁に発信できたか。(再掲) ○ 農大ホームページ等で入試案内、行事等を計画的に紹介するとともに、授業や実習等の動画を載せるなど、積極的に大学校のPRを行うことができたか。(再掲)	○ 広報委員会を6月28日、8月23日に開催し、広報実績を振り返り、今後の予定、方法を検討した。 ○ 農大専用HPのブログでは、入試、オープンキャンパス、のうだい屋、農大祭等の行事に関する情報を発信し、農大をPRすることができた。 ○ 学生自治会でもInstagramによる発信を行事の都度行い、学生目線での情報発信を行うことができた。 ○ 授業の様子や学校行事等を農大専用ホームページに随時アップロードするとともに、学生自らがInstagramで情報発信 - また、県庁部局会見において、在校生による学生募集等のPRを実施 ○ 学校案内等は、県ホームページ(以下HP)でプレスリリースしたほか、農大専用HP・試験場HP・Instagramへの掲載、農業関係団体の専門誌やHPにも掲載し、積極的にSNSを活用した。	■ 引き続きタイムリーなホームページへの掲載に努める。(再掲)	B
	予算執行の適正化を図る	○ 計画的な予算執行と無駄を無くすため、農場は専攻別に、管理運営は費目別に執行状況を管理し調整できたか。	○ 農場関連経費は費目別に予算執行状況を把握し、職員への情報提供及び執行時期等の調整を行い、計画的に予算執行を行うことができた。		B

(2)実践経営者コース

対象	評価項目	評価の観点	達成状況		R6評価
			成果(○)と課題(●)	改善策(■)	
学習指導	授業実習内容の充実を図る	○ 1年生における各論実習の充実と目的意識を持った農業経営体験実習をさせることができたか。 ○ 模擬経営の実践の中で経営分析させることで、経営力の向上ができたか。 ○ 希望する就農形態に合わせて模擬経営と長期農業経営体実習を適切に選択するとともに、就農後予想される課題の把握と対応策が検討できたか。	○1年生2名が各論実習、農業経営体験実習に取組んだ。専攻職員や研修先農家と連携を取りながら、就農時の品目を中心に技術習得させることができた。 ○模擬経営に取組んだ2年生3人は実績のまとめの中で経営分析等を実施した。 ○2年生4名は、それぞれが希望する品目で模擬経営(3名)と長期農家研修(1名)に取組み、栽培面及び販売面の課題や問題点を把握し対応策を検討することができた。 ●アスパラガスが定植後年数が経過し欠株等が発生しており、計画通りの収量が上がらなかった。また、ハウスについても一部修繕が必要であった。(再掲)	■アスパラガスについて新植して整備を図る。(再掲)	B
	個々に適した進路選択、決定、実現を図るとともに、円滑な就農を推進する	○ 就農支援プログラムに基づき、早めに関係機関や研修先農家と連絡を取りあい、就農形態に応じたきめ細かな個別就農支援ができたか。 ○ 職員間の連携により、授業計画、授業管理などのコース運営と就農支援が一体的に実施できたか。 ○ 卒業生との意見交換会を実施し、就農に向けた心構えなどアドバイスをもらう支援ができたか。 ○ 現役農業経営者にアフターフォローを依頼する等、卒業生のフォローアップが充実できたか。	○1年生2名については、地元の農業支援センター、市町村等との顔合わせを3月に実施する予定。 ○2年生4名は、関係機関や研修先農家と適宜連絡を取り、卒業後の就農に向けて支援してきた。 ○週間予定の共有及び職員会議で就農支援状況等を検討し、職員間の連携を図り就農支援を実施した。 ○卒業生と在校生の意見交換を実施し、就農に向けた意識の醸成を図った。 ○農業経営体験実習先農業者等による支援により就農に結びついた。また、就農後の経営安定についても支援いただいた。	■引き続き就農支援プログラムに基づききめ細やかな就農支援を行う。	B
	学校運営	○ 就農に向けた相談会、コース説明会等の通年実施や農業高校への働きかけ等によりコースの内容等をアピールし、効果的な募集活動ができたか。 ○ 独自の募集チラシを作成して関係機関や団体に配布し、募集の周知ができたか。 ○ 市町村やJA等の関係機関、団体と連携を密にし、人材の掘り起こしができたか。 ○ 農大ホームページのブログやメディア等様々なPR媒体の活用等により、授業内容や卒業生の営農状況を紹介するなど、効果的なPRができたか。	○県内外の就農相談会でコースのPRを行った。 ○農業高校でのガイダンスで実家が農家の学生に対して積極的にコースのPRを実施した ○信州の果実・そ菜、のうさい長野、信濃毎日新聞、Web広告、JA機関誌により学生募集を実施した。 ○募集チラシを作成し、市町村、JAや関係団体も出席する県下10広域の就農コーディネーター会議等で配布するなど周知を図った。	■高校生以外へのPR方法について検討をする。(再掲)	B

(3)農業経営コース

対象	評価項目	評価の観点	達成状況		R6評価
			成果(○)と課題(●)	改善策(■)	
学習指導	授業実習内容の充実を図る	○ プロジェクトは、学生の能力に応じて経営管理力を習得させるよう、全学生が経済性の検討を充実するとともに、労働時間の考察や検証が取り入れられたか。 ○ 1年生によるプロジェクト巡回は、事前指導により質疑応答など活発に実施できたか。 ○ ゼミナールによる先進農家視察が実施できたか。 ○ マーケティング手法の習得を目的として、のうだい屋(5回)と農大祭が実施できたか。また、農大祭では、1、2年生間で販売・運営方法の伝承や販売物の確保ができたか。 ○ 現地体験実習の受け入れ方法等の見直しを行えたか。	○農経2年41名がプロジェクト課題を実践し、プロジェクト課題を通して経営管理力を習得することができた。プロジェクト発表関東ブロック大会において最優秀賞、第5位を受賞した学生が各1名おおり、全国大会には1名が出場し優良賞を受賞した。 ○1年生によるプロジェクト巡回の事前学習はプロジェクト講義等を通じ行った。 ●時期が7月で1年生はまだ自分事化できていないこと、専攻2年生が各ほ場で説明を行うが1年生には遠慮があり専攻担任が質問する場面があった。 ●経済性の検討や労働時間の考察・検証は半分程度の学生のみとなってしまう。 ○8月から10月に計5回のうだい屋を開催、11月に農大祭を開催した。1・2年生が協力して販売を行い、その手法等を継承することができた。 ○現地体験実習の実施方法を見直し、受入農家及び農業農村支援センターの負担軽減を図った。	■巡回のみでなく、専攻1年生と2年生間での実習時及び寮生活等での交流によるプロジェクト学習に対する理解を深める。 ■プロジェクトの課題設定を行う過程や進捗管理を行う中で経済性や労働時間などの経営管理の取組を徹底させる。	B
	個々に適した進路選択、決定、実現を図るとともに、円滑な就農を推進する	○ 就農への意識づけに向け、農業経営演習を充実できたか。 ○ 就農支援プログラム等に基づく様々な就農形態に応じた個別、計画的支援ができたか。 ○ 卒業生を就農地の現地機関に確実につなげることができたか。 ○ 農業法人合同説明会等を開催するとともに、インターンシップの実施により就農意欲の向上を図れたか(就農率40%以上)。	○就農支援について、先輩農業者等による講義だけでなく、卒業生が就農した農業法人への視察等を実施した。 ○農業法人への就農者について、農業農村支援センターへ情報提供を行った。 ○農業法人等合同説明会を開催し、24法人が参加された。 ○長野県農業法人就業フェア等に参加し、13名の相談があった。 ○1年生1名がインターンシップを実施した ●JAや農業関係企業への就職が多く(53.3% R540.5%)、就農率は、26. 3%となった。ただし、5年～10年後祖父母の農業経営を継承する予定の学生が一定数いる。	■令和6年度内に個別面談を前倒しで行い、就農希望の把握に努めるとともに、早期の就農や法人就農についての情報提供に努める。	C
	学校運営	○ サンデーオープンキャンパス、オープンキャンパスの充実と体験学習の見直しにより、農業大学校への関心を高めることができたか。(再掲)。 ○ 高校訪問や進路指導担当教諭会議等を通じて農大のPRや情報収集ができたか。また農業高校以外の進路担当教諭にも十分周知できたか(再掲)。志願倍率1.5倍	○オープンキャンパス(以下OC)と体験学習を同日開催することで参加しやすい工夫を行い、本校の概要説明、校内見学、個別相談により高校生等にPR、実科研究科では場公開に併せてのPRを行った。 また、総合農学科では新たに3月も実施予定〔参加者数〕夏OC(2日)120名、果樹実科研究科(1日)3名、体験学習(1日)8名、サンデーOC(18回)36名、銀座NAGANO説明会10名(3世帯)、高校進路ガイダンス・学校見学受入れ 2月末現在(のべ19校)201名 ○高校訪問では実科研究科と連携し、県内の農業高校及び入学実績高校(58校)へ学校説明・情報収集を実施。また、今年度新たに、北陸3県の農業高校(6校)へも訪問した。 ○農業高校との連携では、5月に農業高校進路担当教諭会議を、6月9月2月に農業大学校と農業高校の連携会議を開催し、校長及び進路担当教諭との意見交換・情報共有した。 ○授業の様子や学校行事等を農大専用ホームページに随時アップロードするとともに、学生自らがInstagramで情報発信した。また、県庁部局会見において、在校生による学生募集等のPRを実施した。 ○学校案内等は、県ホームページ(以下HP)でプレスリリースしたほか、農大専用HP・試験場HP・Instagramへの掲載、農業関係団体の専門誌やHPにも掲載し、積極的にSNSを活用した。 (ここまで再掲) ○推薦入試に指定校制を導入(県内農業高校を指定) ○3月に追加募集を実施予定 ●志願倍率(暫定値):R7入試0.88倍)	■引き続きタイムリーなホームページへの掲載に努める。(再掲)	C